

教育研究室だより

発行：亀山市教育委員会
教育研究室
NO.2 2012.8.3

教育研究室では、今年度、市内の保育所、幼稚園関係者による幼児教育カリキュラムの統一について検討を進めています。また、それと併せて、市内の保幼・小の教職員が連携し、幼児期の「遊び」から「学び」につなぐ取り組みを始めています。その第1回目として、7月5日（木）亀山市総合福祉センターあいあいで教職員研修会を開催しました。講師は、昨年亀山市教育研究会図工美術部会の研修会にもお越しいただき、ご講演いただいた、大阪教育大学講師・木の実幼稚園園長の今川公平先生です。今回は市内の幼稚園や保育園の先生をはじめ、教育関係者等37名が参加し、幼児期からの表現活動について学びを深めることができました。幼児期は物や人など、新しいモノと初めて出会う時期であり、感性が鋭い時期だと言えます。そこで、教師側が何を与え何を考えさせるのか、木の実幼稚園や、イタリアのレッジョ・エミリア市の幼児教育の事例を交えながらお話いただきました。以下に紹介します。

今川先生が幼児教育で大切にしている「遊び」について

子どもに「試して遊ぶ体験」をさせる

例えば、色で遊ぶ、絵の具で遊ぶ、色を混ぜるとどうなるか、塗り重ねるとどうなるか、何度もやってみる。こうした事が造形活動だ。他にも、石・砂・自然物に触れ、並べたり、組み合わせたり、いろいろ試してみる。その過程で、モノが持つ可能性に気づくことができる。

「試して遊ぶ」ことのできる空間と時間を保障する

ゆっくりと楽しめる時間を確保し、じっくりとやらせてみる。その為に、木の実幼稚園では全ての保育室でコーナー活動を取り入れている。また、イタリアのレッジョ・エミリア[※]では、ミニアトリエがあり、空間と時間が保障されている。そこから豊かな活動が生まれる。

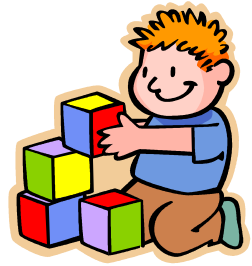
空間が持つ力を重視する

“空間（スペース）は、第3の教師”。どの保育室にも、安心できる場、落ち着ける空間や照明をレイアウトすることが非常に大事。保育室が子どもたちにとって落ち着ける場・心地良い場になっているかどうか、教師は常に気を配る必要がある。レッジョ・エミリアではどの保育室にも光と影を使って遊ぶスペースがあり、スクリーンに映像を映し、現実の空間と非現実の空間を行ったり来たりできる仕掛けが用意されている。



見たことだけでなく、ファンタジー（見立て）を大切にする

積み木を電話に見立てて受話器にして話したり、車のように走らせたりと、何かに見立てる活動を幼児期では一番大切にしたい。いもほりや消防車の絵といった行事の絵よりも、むしろ見えるもの以外を想像して描く力も身に付けさせたい。ベースは、2・3才から自分の描いた絵に子どもがいろいろなお話をつける楽しさの経験だ。教師は子どものお話を聞いて、うなずいて、一緒に喜んでやることが、何より大切だ。それを繰り返すと、誰もが描けるようになっていく。描けない子や作れない子はいない。どの子も聞いてやれば、自分の思いが描けるようになってくる。そうすれば、自然とファンタジーも描けるように子どもは育っていく。木の実幼稚園でも、年長児に万博公園の太陽の塔を実際に見る前に、想像して描かせてみたが、見てから描いた絵よりもずっと面白いものが生まれた。

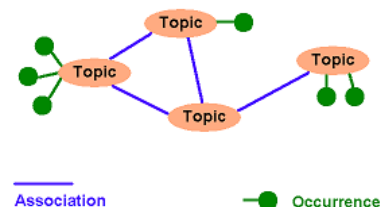


以前の経験と今の経験とのつながりを考えて提示する

「あ、そうか!」という気づきが学びであり、経験が蓄積していくような活動にしていこう配慮を行いたい。「つなげて深める」がキーワード。

プロジェクトアプローチ^{*}によるカリキュラム

トピックないしテーマについて広く深く学ぶようにする。木の実幼稚園では、教師はトピックウェブという図面を描く中で、それぞれのトピックに関連するものを挙げていき、どのように遊びの中で学ばせるかを考える。



思いつきの、何でもありの保育ではなく、経験をつなげていくのがプロジェクト型の保育。そこで、クリエイティビティの原点となるのは、幼児期の遊びであり、これに教師も関心を持つことが必要。アートは芸術というよりも、アートは広い意味での技術、技（わざ）である。

五感で楽しませること

五感で楽しみながら様々な製作をすることが幼児教育では特に効果的である。レッジョ・エミリア市では、いろんな粉を木に塗る、においや形など属性ごとに集める、木と糸でギター・マリンバのような音を出す（音の彫刻）、自然物を集めて分類し「自然物のパレット」を作る遊びがあった。更に、自然物である花の匂いを楽しむことから遊びをスタートし、匂いの元であるハーブをハンドクリームに混ぜてオリジナルハンドクリームを作る。そして、香りを楽しみながら、ハーブを使ったパスタを作る。このように、経験を重ね、学習を遊びからどんどん深めていく取り組みも行っている。他にも、効果があったものとして、遊びの感覚から光と影を巧みに利用し、「今、見えている世界ではないもの」を見せる活動もあった。



教師が価値観・哲学・文化を持っていること

「こんなものをやってみない?」と伝え、子どもがそれにのる。子どもの興味・関心だけではなく、教師が、「こういうのも素晴らしい」というものを持ったうえで、子どもに提示する必要がある。木の実幼稚園では音楽家やアーティストを招き、専門的立場から大人の文化を紹介したこともあった。レッジョ・エミリアでも、様々な職人さんや、色々な技能を持った保護者が積極的に保育に関わるのが常である。

遊びの出発点はモノと関わること

モノや素材の可能性については、レッジョ・エミリアの取り組みのように、頭を柔らかくして考えていく必要がある。そしてモノの延長に空間がある。空間の大切さは前述したが、例えば子どもの目線に合わせた窓を教室にデザインする事でも、空間は大きく変わる。何より「世界って面白い、人って楽しいな」ということに気づくことが大事。まずはモノと関わり、そこから人と関わっていくようになる。

レッジョ・エミリアとは…

レッジョ・エミリアは、イタリアの都市。この地で、1960年代にR. マラグッツィが遊びの中での学びをどのようにしていけばいいか、アートを中心に研究実践（レッジョ・エミリアアプローチ）を行った。市当局のバックアップもあり、その基礎は築かれていった。人口14万人の地方都市に起こったレッジョ・エミリアアプローチは、1991年のニューズウィーク誌に「最も革新的な幼児教育」として紹介されてから、世界的な評価を受けるようになった。日本では、東京青山のワタリウム美術館で紹介された。レッジョ・エミリアの教育は、子どもと大人の双方が創造性を発揮し、美的で探求的な活動をとおして共に学び、育ちあうかかわりを形成することを主眼に置いている。親や保育者が、子どものさまざまな表現に対して「見る目・聞く耳」を持ち、同じレベルのコミュニケーションで応答する「術」を体得して初めて、子どもたちは創造性の全エネルギーを開花させることができる。このような「子どもに波長を合わせたコミュニケーション」が成り立つために必要な保育環境・スタッフ養成・育児支援をレッジョ・エミリアの教育は重視している。

（参考資料 東京大学情報学環助教 佐藤朝美「レッジョ・エミリア幼児教育の紹介」）

プロジェクトアプローチとは…

子どもの周りの環境から子どもの興味や関心にあったものをトピックとして選び、幅広く情報を集め、トピックへの理解を深めていく活動のこと。同じ興味・関心を持つ何人かの子どもたちがグループになって活動することや長期間にわたって同じプロジェクトに関わるのも特徴の一つ。具体例として、レッジョ・エミリアの「身体のプロジェクト」が挙げられる。その流れは以下の通り。

①サッカーのTVから、足の形に興味を持つ。→②足の形を粘土で作ってみる。しかし、倒れてしまう。教師は子どもから解決策が出てくるようにサポート。直接は示さない。子ども同士、子どもと先生の話し合いから問題解決。→③次にどのような活動へ進むか、アトリエスタ（アート専門教員）と先生がドキュメンテーション（記録）をもとに相談。→④あるグループは友達の姿を粘土で作る。別のグループはブランコに乗っている友達を線で描画する。もとなになっているのは子どもの活動であり、子どもの言葉や表現を拾いながら、子ども達の一步上の活動をめざして先生が次の活動を決める。

このように、子どもは先生との共同作業によってさまざまな問題を解決していく力をつけていく。

（参考資料 北海道教育大学函館校助教授 奥野正義「科学する心を育てるプロジェクトアプローチ」）

このように、木の実幼稚園での今川先生の取り組みと、イタリアのレッジョ・エミリアの幼児教育についてご紹介いただきました。モノや自然物との関わりや遊びの中から子どもの興味関心をもとに学びを深めていくこと、そしてその根底には子どもとのコミュニケーションがあることを学びました。ただ遊ばせたらよいのではない。レッジョ・エミリアでアトリエスタが専門的な立場から幼児教育のプランニングを行っているように、遊びの中から学べるような支援方法を教師が考える。それを今川先生は大切にされていると感じました。



受講者の声

- ・プロジェクト型保育で学んでいる子どもたちの、伝える力・創造力・表現する力に感動しました。ものとの関わり、人との関わりを大切にしている遊びを出発点としたプロジェクトの有効性を感じました。子どもの成長や実態をしっかり捉え、子どもの興味・関心が何かをしっかりと捉え、大切にしながら「これはやるべき」ということを指導していく大切さを学んだ。今後の授業で活用していきたい。
- ・「遊びの中の遊び」「ときめく体験」それが可能となる環境（物や人との出会い）が人を育てるということを確認できた。貴重なDVD映像を見ることができ、本当にラッキーでした。子どもの可能性は無限大である。芸術をともに培う機会を増やしていくと良いと思いました。レッジョ・エミリアの教師が価値をしっかり持ち伝えている姿勢は見習いたい。
- ・2歳児担任の為、なかなか難しい取り組みはできないかも知れないが、絵の具を使った遊び(混色 etc)は今後も取り組んでみたいと感じました。遊び＝学びが重要であること、ゆっくり試すことを大切に保育をしていきたいと思います。
- ・子どもたちが、色々な物に出会い五感で感じていくことが大切だと思った。行事型の保育ばかりでなく、色々な素材を試し、経験し、人と関わることから遊びが広がっていくことを大切にしていきたいと思った。教師も所々で子どもたちに提案し、子どもたちを繋げていた。子どもたちを教師がどう繋げるかという場面がみれてイメージできた。場所と道具を与えることの大切さを改めて感じた。
- ・豊かな教育環境の中で子どもの意志、思考を生かした活動から思考力・表現力・創造力を養っていくことができるんだと思います。特に活動環境で空間を大切にいかすところはなるほどと思い、可能な限り取り入れたいです。光というものも大切な要素であると感じた。
- ・芸術的活動をするときに、いつも経験したことを絵にしたり、保育士が作ったものを真似て子どもたちが作るものがほとんどで、子どもの想像力や技術を遮断してしまっていたように思いました。今回学んだプロジェクト型保育は、今の日本の保育園や幼稚園ではいきなり取り入れるのは難しいと思いますが、「環境を子どもたちと作っていく」というのをできることから少しずつやってみたいと思いました。